

長野県立歴史館たより

2014年 夏号 vol.79

特集1
館蔵品展 「歴史に煌めく日本の美」

特集2
夏季展 「山とともに生きる」



開館20周年
館藏品展

歴史に煌めく日本の美

— 信濃を彩る名品たち —

平成26年6月14日(土)～7月13日(日)

開館20周年を記念して、長野県立歴史館が開館以来収集してきた優品を一堂に展覧する「歴史に煌めく日本の美」を開催します。

古来より信濃（長野県）は、東日本と西日本、



《木曾海道六十九次の内 軽井沢》
大判錦絵 江戸時代（19世紀） 歌川広重作



《浦島縁起絵》(部分) 紙本著色 江戸時代



《大乘密厳経 卷中》(中尊寺経) 紺紙金銀書 平安時代（12世紀）

あるいは太平洋側と日本海側を結ぶ結節点として、独自の風土と文化をはぐくんできました。その中で当館では、信濃国・長野県の歴史的背景と変遷を明らかにし、信濃の歴史に触れ、歴史学習を深める場を提供するため、様々な活動を行ってきました。その一環として、信濃の歴史や生活、そして風土の諸相を示す史資料や、長野県と関係深い美術工芸品の収集にもつとめて参りました。

今回の館藏品展では、善光寺にまつわる仏教世界や川中島合戦に代表される中世信濃武士の争乱、庶民生活の高まりとともに発達した近世絵画などのテーマに沿った当館の収集資料をご紹介します。

主な展示作品としては、「世界最古級の磨製石器」と目される日向林B遺跡出土の石器、原始芸術の最高峰である縄文土器と翡翠製の垂飾、古代中世の祈りの結晶とも言える古写経、曼荼羅や如来、菩薩像などの仏画、迫力ある屏風仕立ての合戦図等があります。さらには、美術的価値も高い日本刀や、江戸時代後期を代表する美術品である浮世絵版画「錦絵」など、日本文化を彩る当館所蔵の優品を一堂に展覧いたします。当館のコレクションをお楽しみください。

経塚から出土した灰釉四耳壺

ここで紹介する灰釉四耳壺は、長野県埋蔵文化財センターが上信越自動車道建設に先立つ平成4年（1992）の発掘調査によって、千曲川右岸の坂城町観音平経塚から発見されました。緩やかな斜面を削りだして造成された地に掘られた深さ30cmほどの楕円形の穴から、四耳壺は平石で囲われ、その上に石で蓋ふたをされた状態で出土しました。内部に焼骨が充満した状態で発見されたことから、本来は酒器の四耳壺が、最後は蔵骨器として使用されたことがわかります。

本資料は、口径11.4cm、器高21.3cmの大きさで、口縁から肩部にかけて薄い自然釉が掛かっています。内面に輪積痕が観察でき、製作にはロク口を用いていないことがわかります。外面には二本一組の沈線が、頸部から胴部中央の三か所に巡り、肩部の沈線の上に二本の粘土紐を平行に並べ密着させた耳が、四か所に付けられます。また、底にはやや外側に開く断面三角形の高台がつきます。これらの特徴から、国内で生産が始まったばかりの、あまり類例のない12世紀代の四耳壺であることがわかります。灰白色の胎土は美濃窯（岐阜県東濃地方）の特徴で、類似の四耳壺が土岐市丸石窯で焼かれています。12世紀後半に盛んに輸入された中国産白磁四耳壺を模倣したものです。

四耳壺を納めた墓が造られた後、多数のお経が

書かれた石（礫石経れきせききょう）がそれを覆うように納められます。死者の靈魂を、経典のもつ力によって、彼岸の地まで送り出そうと経塚を造ったと考えられます。少し時間をおいて、その上段に五輪塔が建つ火葬骨を納めた施設が造られます。当時の人びとは、経典が納められた経塚を霊地と見なし多くの納骨を行いました。霊場化が進んだ表れではないでしょうか。この灰釉四耳壺からは、中世の人びとの死への想いが伝わってきます。



講演会

平成26年6月14日(土) 午後1時30分～

演題

「日本美術のオリジナリティ」

講師

矢島 新 氏（跡見学園女子大学文学部教授）

講座

平成26年7月5日(土) 午後1時30分～

演題

「歴史館所蔵の美術工芸品案内」

講師

伊藤羊子 氏（長野県信濃美術館学芸員）

山とともに生きる～「信州山の日」制定を記念して～

平成26年7月26日(土)～8月31日(日)



丸山晚霞「盛夏」

(丸山晚霞記念館 蔵)

長野県では「信州山の日」の制定を契機に、平成26年度を「信州の山 新世紀元年」と題し、様々な取組を実施します。当館では7月26日から8月31日まで『山とともに生きる～「信州山の日」制定を記念して～』と題して夏季展を行います。

信州は原始から現代まで、山の恵みとして貴重な山の資源に支えられてきました。この資源は信州のみならず周辺地域にももたらされ、人々の生活を担ってきました。身近な里山を始め、3,000m級の山岳地帯から得られる山の恵みは、それぞれの時代で物質的な資源だけでなく、山の景観や信仰・登山などの精神的な支えにもなり、県民共通の財産として大切に守られてきました。そこで夏季展は館蔵品を中心に、原始シナノの遺跡を始め、資源、観光等を含めた歴史的視点から信州の山について振り返ってみたいと思います。

展示は①山と生きる、②産業資源としての山、③近代登山と信州の三つのコーナーから構成され

ます。

①では人びとが山からの恵みを得て、山への感謝・祈りを捧げていた様子を、考古資料を中心に紹介します。なかでも先土器時代から縄文時代では黒曜石をとりあげ、黒曜石の原産地資料とそれを元にした石器類などを展示します。

②では江戸時代に御料林ごりょうりんとして大切にされた木曾の森林を取り上げ、木曾式伐木ぼっぼく運材図会うんざいずえなどを展示します。

③では近代登山のはじまりや学校登山に関する資料、昭和初期のアルプス登山を宣伝した観光パンフレットなどを展示し、山岳観光の黎明期について振り返ります。

信州にとって山は切っても切れないものです。生活の一部であり、後世に残すべき自然遺産であり、山に関する文化遺産も多々あります。夏季展「山とともに生きる」にご期待ください。

講演会

日時：7月26日(土) 午後1時30分～

演題：「飯綱信仰について」

講師：いづな歴史ふれあい館
学芸員 小山丈夫氏

講座

日時：8月20日(水)

午前10時30分～午後12時30分

演題：「山の日と長野県の近代遺産」

講師：当館 学芸部長 市川正夫

山地の民は 哲学的芸術的宗教的である —— 島木赤彦

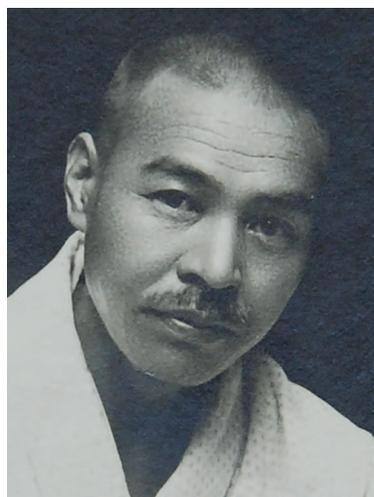
当館では平成24年（2012）、常設展の近現代コーナーで長野県の学校登山の歴史を取り上げました。長野県では学校登山は明治20年代から小学校の行事として始まりました。師範学校で登山の魅力を学んだ青年教師たちが始めたものです。展示では、長野高等女学校の戸隠登山の様子や、同校の教師で博物学としても活躍した河野齡蔵が収集した標本や写真を展示しました。

また、長野県学校登山史最大の悲劇の一つであった大正2年（1913）の中箕輪小学校駒ヶ岳登山遭難事故をとりあげました。新田次郎の『聖職の碑』^{いしづみ}で知られる出来事です。この事故のあと、学校登山廃止論が高まりましたが、教師たちはより安全な登山方法を研究し、学校登山はますます普及していきました。

7月26日(土)から始まる夏季展「山とともに生きる～「信州山の日」制定を記念して～」でも学校登山をとりあげます。3,000メートル級の山々が連なる長野県は、アルピニストのあこがれの地。そんな長野県民にとっては当たり前前の学校登山も、実は全国的にみれば極めて珍しい行事です。県民が山に親しむきっかけを作る行事といえます。

「信州人と山」の関わりを見つめる記念日の制定主旨にふさわしいテーマと考えました。

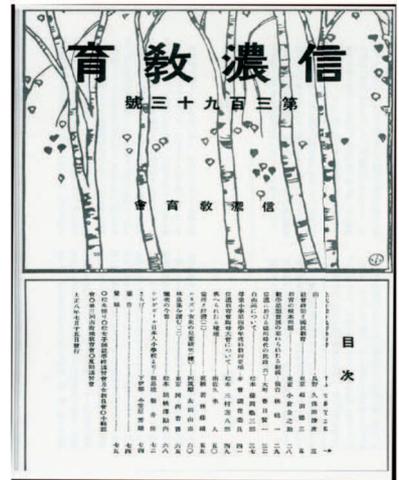
「学校登山が駒ヶ岳遭難事件を乗り越えて普及



島木赤彦（1876～1926）

できたのはなぜか」。私たちは調査を進めるなかで、一人の人物と出会いました。島木赤彦です。諏訪生まれのアララギ派歌人赤彦には諏訪湖を題材にした作品が多く、また万葉歌人のイ

メージも強いのですが、実は生涯山を愛し、山を題材にした多くの秀句を遺しています。また、長野師範学校を卒業し、教師としても活躍、信濃教育会の月刊誌



『信濃教育』の編集主任を務めるなど、信州教育の礎を築いた人物でもあります。今回『信濃教育』を調査するなかで私たちが驚いたのは、彼がそれまで心身の鍛練という面から論じられてきた学校登山を「県民性育成」という観点から位置づけ、登山の存続を強く主張した点でした。赤彦は次のように主張します。

「山国に住むものは地狭くして行歩の上下を要し、行歩の上下に随って眼界が濶く、地を見る部分的散在的でなくて全体的総合的である。山国に住むものの団結心の強いことに此影響を除いて考えることは出来ず、(中略) 山頂のいよいよ高きは天に至り人を絶して宇宙に参し、哲学と宗教が生まれる。山地の民は平原国の民に比して宗教的であり哲学的であり思想的であり芸術的である。高山国民の長所を涵養するにおいて最も思いをいたすべきは長野県教育者の使命である」(大正8年『信濃教育』393号)

長野県の教育者が哲学的・芸術的・宗教的であるのは山の影響であり、それがいけない、根絶しろというなら「山岳と森林とを削って海中に棄てるほかない」とまで言い切ります。赤彦の考察は大変ユニークで、示唆的です。今回の展示では、学校登山の歴史に併せて赤彦の生涯や彼の山への思いを偲ぶ資料を紹介します。



史子さん：このあいだアルクマが「信濃の国」を踊っているのを見たよ！

歴雄先生：新聞でも県内各地で「信濃の国」が踊られているという記事があったね。「信濃の国」はもともと長野県師範学校（現信州大学教育学部）の運動会で踊られた女子部生徒の遊戯、今でいうダンスの曲だったんだ。

史子さん：それがなんで県民の間に広がったの？

歴雄先生：長野県師範学校を卒業した先生たちが、県内各地の学校で子どもたちに教えて広まったんだよ。多くの県民が歌うことのできる県歌は全国的に珍しいんだ。

史子さん：そういえば「信濃の国」はいつつくられたの。「信濃」だから江戸時代のお侍さんも歌っていたのかなあ。

歴雄先生：「信濃の国」は長野県師範学校の先生だった^{あさいきよし}浅井冽が、明治32年（1899）に作詞したもの。だから江戸時代には歌われていないよ。でも115年前の歌が、現在も多くの県民に親しまれているのはすごいことだね。



浅井冽（1849～1938）

史子さん：どうして長野県民は、みんな「信濃の国」を歌えるんだろう。

歴雄先生：いろいろな説があるけど、一度聞くと忘れられない印象的なメロディによるところが大きいん

じゃないかな。

史子さん：楽譜は2つあるって聞いたことがあるよ。

歴雄先生：そうそう、よく知っているね。最初の楽譜は昔ながらの雅楽風のもので、優雅な曲だけ

どそれほど広まらなかったんだ。^{きたむらまさはる}北村季晴が明治33年（1900）に今のメロディをつけてから、広く県民に親しまれるようになったんだよ。

史子さん：歌のなかには信濃の地理や歴史がたくさん出てくるけどどうして。

歴雄先生：この歌が作られた当時、唱歌による地理・歴史教育が流行していたんだ。もともと地理や歴史を勉強するための歌だったんだね。

史子さん：じゃあ何で県歌になったの。

歴雄先生：長野県が明治100年の記念として県章、県木（シラカバ）、県鳥（ライチョウ）などを決めただけで、そのときに「信濃の国」を県歌という機運が高まったんだ。それで昭和43年（1968）5月20日県歌に制定されたんだよ。

史子さん：ありがとう。

これからも大切にしたい歌だね。



北村季晴（1872～1931）

今年度より「信濃の国」に関する資料とパネルを常設展示の近現代コーナーで展示しています。ぜひご覧ください。



歴史館をもっと身近に

企画展や講座に
何回も足を運ぶ方は、

パスポート会員がお得!

歴史館では、企画展示室で年6回程度、企画展・季節展・館蔵品展を開催し、常設展示室の展示替えも随時行っています。また、観覧料の必要な講座・講演会は、年50回ほど実施しています。「そのつど観覧料を払うのはちょっと…」という方は、パスポート会員にお申し込みください。

年会費2,000円で、申し込みいただいたその日から1年間、無料で常設展・企画展を観覧できます。もちろん講座・講演会も無料です。さらに、研究紀要・ブックレット・企画展図録の中から1冊(1,000円相当)を進呈します。年4回発行の『歴史館たより』も郵送します。

小・中・高校生は、入会無料です(刊行物の進呈はありません)。パスポート会員になって、歴史館を大いに楽しみましょう!



平成25年度秋季企画展「刃が語る信濃」の講座終了後に行われた展示解説を、熱心に聞く観覧者



平成25年度に刊行された出版物

「歴史館は遠いなあ」
という方々には、

出前講座・出前授業

歴史館では、県内市町村等の博物館・美術館や、各種団体と連携して、出前巡回講座を実施



平成25年度 飯田市美術博物館で行った連携講座の様子

しています。今年度も飯田市、安曇野市、長野市等へ出前巡回しますので、各会場でお待ちしております。

今年度の巡回展は、「長野県の遺跡発掘2014」を7月19日(土)～8月24日(日)の期間、伊那文化会館で開催します。

このほか、小・中・高校へ出向き、出前授業も実施しています。また、グループで「県政出前講座」に申し込んでいただく方法もあります。ぜひ、ご活用ください。

INFORMATION

インフォメーション



■2014年 5月～8月の行事予定

5月

休館日
26

速報展

長野県の遺跡 発掘2014

開催中～6/1(日)

講座・イベント

古文書講座

第1回 上級 5/24(土)

考古学セミナー 5/24(土)

13:30～15:30 県考古学会
第39回 藤森栄一賞受賞記念講演
「森將軍塚古墳の保存と整備」
講師 矢島宏雄(千曲市教育委員会)
遺跡報告会

6月

休館日
2・3
9・16
23・30

館藏品展

開館20周年 歴史に煌めく 日本の美

～信濃の歴史を彩る
名品たち～

6/14(土)～7/13(日)

講演会

6/14(土) 13:30～

「日本美術のオリジナリティ」

講師 矢島 新氏

(跡見学園女子大 文学部教授)

講座

7/5(土) 13:30～

「歴史館所蔵の

美術工芸品案内」

講師 伊藤 羊子氏

(長野県信濃美術館 学芸員)

夏季展

山とともに生きる

～「信州山の日」制定を
記念して～

7/26(土)～8/31(日)

講演会

7/26(土) 13:30～

「飯綱信仰について」

講師 小山 丈夫氏

(いづな歴史ふれあい館 学芸員)

講座

8/20(水) 10:30～12:30

「山の日と長野県の近代遺産」

講師 市川 正夫

(当館 学芸部長)

古文書講座(通年受講生)

第1回 初級A 6/1(日)

初級B 6/19(木)

中級A 6/7(土)

中級B 6/19(木)

第2回 上級 6/28(土)

歴史館セミナー①

6/21(土) 13:30～16:00

福島正樹 絹本著色一光三尊像

林 誠 明治三陸地震津波の

新聞報道と絵画

寺内隆夫 立体的な土器装飾への道

市川正夫 小谷村の地理・歴史と暮らし

考古学講座②

6/28(土) 13:30～15:00

西山克己氏(長野県埋蔵文化財センター 講師) 第1課長

シナノの積石塚古墳

古文書講座(通年受講生)

第2回 初級A 7/6(日)

初級B 7/17(木)

中級A 7/5(土)

中級B 7/17(木)

第3回 上級A 7/26(土)

古文書講座(通年受講生)

第3回 初級A 8/3(日)

初級B 8/21(木)

中級A 8/2(土)

中級B 8/21(木)

第4回 上級 8/23(土)

歴史館で夏休み

8/8(金)～10(日)

表紙写真の説明

どうぶつそうしよくつきつりてどき
《長野県宝 動物装飾付釣手土器》

富士見町札沢遺跡出土品 高さ16.6cm (当館蔵)

本資料は、縄文時代中期中葉の釣手土器である。香炉部は、縄文が施されただけの簡素な装飾であるが、釣手部は丁寧な装飾でおおわれている。さらに、釣手部上には3匹のヘビに似た生き物が配置されている。香炉部後方から釣手部へ這い上がろうとする1匹を加え、今にも動き出さんばかりの優れた造形であり、縄文人の豊かな感性と表現力がうかがえる。

1930年代に発見され、ながらく東京国立博物館に寄託展示されていた。1994年に所蔵者から県に寄贈され、当館蔵となった。

行事アルバム



講演会・遺跡報告会 3月22日(土) 県埋蔵文化財センター職員による弥生時代に関する報告の後、「ヒミコ時代の信州と西日本」と題し、工楽善通氏(大阪府立狭山池博物館長)にご講演いただきました。会場は215名もの参加者であふれ、「赤い土器のクニ」信州について、改めて関心の高さを実感しました。



遺跡報告会 4月19日(土) 速報展内のテーマ展示「長野県の近世城郭・城下町発掘最前線」にちなみ、松本市・長野市・飯田市の各埋蔵文化財担当者から報告をいただき、発掘最前線での新鮮な情報を知ることができました。参加者62名。

長野県立歴史館たより 夏号 vol.79

2014年(平成26) 5月20日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6

電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996

E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp

ホームページ <http://www.npmh.net>

印刷 奥山印刷工業(株)